



# みち 古道が紡ぐ物語



## 伊勢を祀る女性たちの道（倭笠縫邑伝承）

皇祖神天照大神が伊勢神宮に祀られるようになった経緯は「日本書紀」に詳しい。第10代崇神天皇<sup>すじん</sup>期に、卜定<sup>ぼくじょう</sup>で大神を皇居外の日本で最も良い所で奉斎すべしとの御託宣があり、皇女豊鍬入姫命<sup>とよすきいりひめのみこと</sup>が「倭笠縫邑」に祀ることとなった。天照大神・伊勢神宮に奉仕する皇族女性である斎宮は、伝説ではこの命<sup>みこと</sup>を最初とし、第11代垂仁天皇期には、倭姫命<sup>やまとひめのみこと</sup>に引き継がれ、各地を経て現在の伊勢神宮の地に遷した。ただ、笠縫邑の詳細な位置は不明で多くの比定地が存在しており、中でも三輪から巻向川をさかのぼり大和高原に至る地域は、古くから開かれた地域で数々の伝承が残る。

七世紀後半から十四世紀にかけての、制度としての斎宮制度は第40代天武天皇期に始まり、初代斎王には皇女大来皇女<sup>おおくのひめみこ</sup>がわずか12歳で選ばれ伊勢に下る。大和高原には、その際の精進潔斎の地としての伝承も残る。

### 伝説の斎王 伊勢奉祀の跡「元伊勢」

日本書紀によると、第10代崇神天皇の御代、皇祖神天照大神<sup>あまてらすおおかみ</sup>を宮中に祀ってきたところ、卜定<sup>ぼくじょう</sup>で、天皇と神との「同床共殿」は畏れ多い、皇居外の最も良い所で奉斎すべしとの御託宣があった。そこで、皇女豊鍬入姫命<sup>とよすきいりひめのみこと</sup>に託して天照大神を宮中から倭の「笠縫邑」に遷し、「磯城神籬」を造り祀ったとされる。神籬とは神を迎えるための依り代のことで、常緑樹や岩の周囲に玉垣をめぐるして注連縄<sup>しめ</sup>で囲ったものである。

第11代垂仁天皇期には、倭姫命に引き継がれ、天照大神鎮座に適した地を求めて諸国を巡り、現在の伊勢神宮の地に遷したとされる。

日本書紀は笠縫邑の正確な位置は示しておらず、そのため多説あるが、最も有力とされるのが大神神社の摂社「松原神社」で「元伊勢」と呼ばれ、社号標には、「大神神社攝社松原神社」「皇大神宮聖蹟 倭笠縫邑」が掲げられている。

大神神社のやや北側で、本社と同様に三輪山をご神体としており、境内には「豊鍬入姫宮」が祀られているが、これは昭和61年創祀という。

### 巻向から大和高原にかけての笠縫邑伝承

奈良盆地から桜井あたりの大和高原を望むと、古代大和の象徴ともいえる三輪山、そして巻向山、龍王山が連なる。その山間を流れる清流、巻向川

豊鍬入姫宮と  
松原神社（奥）



右から三輪山、巻向山、  
龍王山支峰穴師山

の作る台地に松原神社は立つ。

この川は数々の万葉歌の題材ともなり、流れが作り出した扇状地には、3世紀頃に古代都市「纏向遺跡」が栄え、さらに、垂仁天皇の纏向珠城宮、景行天皇の纏向日代宮が営まれたとされている。

また、今は巻向川対岸の斜面に祀られる「穴師坐兵主神社」<sup>あなしにますひょうずじんじ</sup>（桜井市大字穴師）も有力な笠縫邑伝承の地で、元は巻向川上流の「弓月ヶ嶽」、すなわち巻向山にあったとされる。

この弓月であるが、秦始皇帝の後裔「弓月君」<sup>ゆづきのきみ</sup>が新羅に追われ、120県の多くの民を引き連れて帰化し、この辺りに住み着いたことに因るともいわれる。上質な織物の技術を持つことから「秦」



日本三大荒神の一つ笠山荒神社にも倭笠縫邑伝承がある。

瀧蔵神社の社叢は大和高原の豊かな植生を示す



倭笠縫邑・泊瀬斎宮旧跡伝承地の碑が建つ小夫天神社

姓を賜ったとされるが、その他にも、金属の鑄造・鍛造技術などを持つ集団であり、兵器の神「兵主」を祀る神社があることにも関係性がある。

巻向川に沿って、道は奈良県道 50 号線として整備され、ウォーキング、ハイキングの人気ルートでもあり、いくつもの万葉歌碑が立つ。さらに上流にたどると笠郷（桜井市大字笠）である。日本三大荒神の一つ「笠山荒神社」があり、ここにも倭笠縫邑であったとの伝承がある。

この辺りは分水嶺で、<sup>はつせがわ</sup>泊瀬川の源流となる数々の支流が集まり、川は南の長谷寺方面に流れる。県道は 38 号線に合流するが、この道に沿い、別の支流を少し上ると、長谷寺の奥の院とされる<sup>たきくら</sup>瀧蔵神社への山道がある。

長谷寺へお参りしても当社へ参詣しなければ御利益は半減すると伝えられ、「今昔物語」では、本殿にあまりに大勢が詰めかけたため崩れ落ちた逸話が記されている。鬱蒼と茂る社叢の中に、今はひっそりと建つが、三間社・流造で朱塗りの本殿などは往時のにぎわいを偲ばせる。

瀧蔵神社の社叢は椎や檜が盛んで、大和高原地域の気候帯を反映した極相林の状態では保存されており、県の天然記念物に指定されている。

大和高原地域は、食料となる実の成る樹木が茂る豊かな地で、太古から人々が暮らし往来した開かれた地であった。神社近くには、「都祁伊勢街道」の道標もみられ、細い山道ではあるが大和から伊勢へ人が行き交った歴史を持つ。

山道を県道 38 号線に戻ると小夫郷（桜井市大字<sup>おおぶ</sup>小夫）である。ここで、県道沿いの大きな石碑「倭笠縫邑・泊瀬斎宮旧跡伝承地」が目を引く。「小夫天神社」の参道で、ここもまた倭笠縫邑の伝承が残り、さらに、天武天皇の皇女で、制度上の初めての齋王とされる<sup>おおくのひめみこ</sup>大来皇女が精進潔斎した<sup>はつせいつきのみや</sup>「泊瀬 齋 宮」跡とする伝承もある。

### 実在が確認される初代の齋王大来皇女

小夫の隣、大字修理枝には豊鍬入姫命が化粧用の水を取ったとされる化粧川と化粧壺の跡も伝わり、古くは天然の地磐岩で、川の中央に窪んだ溜<sup>おおくのひめみこ</sup>がある。後世の<sup>おおくのひめみこ</sup>大来皇女が御禊を行った旧跡ともいわれるが、今は田畑が伸び化粧壺という岩場のみが現われている。

実在が確認される最初の齋王である大来皇女は、わずか 12 歳で齋王に選ばれ伊勢に下る。天武天皇を父とし、天智天皇の皇女<sup>おおたのひめみこ</sup>大田皇女を母とするが、幼くして母と死別し、さらに、天武天皇崩御後、仲の良かった同母弟大津皇子が謀反の罪で死を賜うなど、さびしい晩年を送った。

二上山に葬られた弟を偲んだ万葉歌、「うつそみの人にあるわれや明日よりは 二上山を<sup>いろせ</sup>弟背とわが見む」は、大来皇女の哀しみが、後世の人々の心にも素直に伝わってくる。

大和高原を伊勢方面に下った名張市夏見にはかつて大寺院（夏見廃寺）があったが、11 世紀初頭の「薬師寺縁起」に、大来皇女の発願により亡き父天武天皇を偲んで伊賀国名張郡に「昌福寺」が建立されたとあり、その寺ではないかと考えられている。（山城 満）